

語用論から見た「ほめ発話」効果
—「アイ・メッセージほめ」と「ユー・メッセージほめ」を中心に—

甘能清 (中国華南師範大学), 石 剛 (成蹊大学)

成蹊大学一般研究報告 第50巻第1分冊

平成28年6月

BULLETIN OF SEIKEI UNIVERSITY, Vol. 50 No. 1

June, 2016

語用論から見た「ほめ発話」効果

—「アイ・メッセージほめ」と「ユー・メッセージほめ」を中心に—

甘能清 (中国華南師範大学), 石 剛 (成蹊大学)

要旨

本論文は、外国人日本語学習者における「先生の授業はよかったですね」という「ほめ発話」を例に、文化的視点ではなく、言語的視点から分析を行った。「アイ・メッセージほめ」と「ユー・メッセージほめ」における語用論的效果の相違点を分析した結果、「先生の授業はよかったですね」は定式化された日本語のほめ表現形式の活用であるが、「ユー・メッセージほめ」であるため、「アイ・メッセージほめ」の「いい勉強になりました」などのように改善したほうがより語用論的效果が大きいという結論に至った。

キーワード：ほめ発話 語用論的效果 アイ・メッセージほめ ユー・メッセージほめ

1. はじめに

すでに広く指摘されているように、「ほめる」という言語行為は、話し手と聞き手の間に連帯感を確立させる、または強化させる機能を持っている。ほめることには、対人関係を良くするためのパワーが秘められているとも言われる。日本でも、「ほめて育てる」ことが推奨され、学校では、先生がほめることを通して学生たちの自信を育み、その可能性を広げようとしている。言うまでもなく、ほめることによって効果が得られることは、教育の現場だけでなく、日常のコミュニケーションにおいても、ビジネスの場においても、相手をほめることにより人間関係が良好になる。職場に喜びの共感が広がり、従業員の満足度がアップされるだけでなく、顧客の満足度向上にも繋がっているという研究がある。本間・祐川 (2006) によると、九割の人は、ほめられて育ちたいという。それ故に、コミュニケーションにおいて、ほめるという言語行動は、ますます重んじられるようになった。

それに関連して、「ほめるテクニック」に関する出版物もよく見られるようになった。そこからの影響されるためか、最近、中国人日本語学習者の間にも、日本語によるほめ表現の使用もよく見られるようになってきた。しかしながら、日本語教育におけるほめ表現に関しては、テキスト等での扱いかたから言えば、効果的に学習できていないとい

うのが現状のようである。そのためか、学生からよく、「先生の授業はよかったですね」、「先生の説明はお上手ですね」など、不適切だと考えられる例がしばしば見られる。外国人学習者には、なぜ「先生の授業はよかったですね」のような、その場面や人物の身分、さらに言語的慣習にそぐわない表現がみられるのだろうか。また、文法上は間違いもないのに、なぜこのような表現は不適切と思われるのだろうか。

これについては、今までに日本語教育の現場などで、多数の研究がなされてきた。最もよく指摘されている原因として、国と言語の文化的差異に帰結させるのがほとんどである。異なる言語と文化、さらに異なる伝統と思考様式などは、言語表現とコミュニケーションの現場における発話行為に影響を及ぼしているから、このような指摘にはそれなりの根拠と理由があるだろう。しかし、これだけでは大まかで、漠然すぎるだけでなく、教育の現場でも学生に理解されがたいところがある。「どうせ文化が違うから、表現が間違っても仕方がない」と思われてしまい、これ以上追求をしなくなる恐れもある。そのために、こうした漠然としたいわゆる「文化的」視点の代わりに、言語そのものから出発して、「ほめ発話」という日本語表現の特徴を分析し、語用論の立場として、外国人学習者の不適切とされる使用例を言語心理的側面から原因の究明を試みたい。これにより、実際の言語生活におけるその誤用の発生理由を理解することはあながち無意味ではなからう。

2. ほめ発話の表現形式の先行研究

日本語のほめに関しては、これまで主として心理学、社会学、言語学という三つの側面から研究がなされてきた。言語の視点からの研究は、ほめ言葉の運用、「ほめ」の定義、「ほめ」の機能、「ほめ」の分類、「ほめ」の方法・ストラテジー、「ほめ」の対象、「ほめ」の表現形式及び「ほめ」への返答など幅が広がっている。拙論では日本語のほめ表現を中心に先行研究を踏まえたうえで議論を展開していきたい。

周知のように、ほめの真意を受話者に疑われないようにするため、「ほめ」には、感謝の表現や挨拶ほど決まりきった言い方はないようである。それゆえ「ほめ」は会話のどの部分にも現れることができ、また、通常より大きなディスコースユニットの一部としても現われるようである。一方、良好な関係を築き、維持する上で障害となりかねない曖昧さや混乱をできるだけ避けるようにほめる方がより効果があると言われ、「ほめ」は定式 (formula) 化されているとも言われる。実際、Manes and Wolfson (1981) などは英語の「ほめ」をアンケート調査に基づいて考察した結果、社会的方略として「ほめ」は定式化され、よく使われる文型には、次のようなものがあると述べている。

NP+BE/LOOK+ (really) ADJ

PRON+BE+ADJ (+NP)

I+ (really) LIKE/LOVE+NP

しかし、言語が異なれば、ほめの具体的な表現形式も異なると考えられる。日本語の

「ほめ」の表現形式にはそれなりの特徴がある。日本語の表現形式に関しては、熊取谷(1989)及び丸山(1996)の研究が注目される。

熊取谷(1989)は、Wolfson(1983)、Manes and Wolfson(1981)などの研究で明らかにされた成果を参照しながら日本語におけるほめ表現の特徴を意味論的な見地から考察した。その結果、次の三つの型が日本語のほめ表現形式の大半を占め、その中で第一の型が最も多いという結論を導いている。

(1)「対象物+形容詞」。

例えば、「そのセーターいいね」、「そのイヤリングかわいい」、「昨日の歌すごくよかったよ」など。

(2)「形容詞+対象物」。

例えば「わあ、かわいいイヤリング」、「あ、かわいい、Bのブーツ」など。

(3)「対象物+好み」。

例えば「あれが一番好きだったな」、「わたし、そのスカーフ好き」など。

これに基づき、日本語のほめの表現形式上の特徴として、熊取谷(1989)は次の三点を指摘している。

(1) ほめの対象となる意味範疇の種類が限定されている。

(2) 評価語類には特定対象と結びつきやすいものと一般的なものがあり、一般的なもの(特に「いい・よい」)は幅広い対象について用いられる。

(3) 使用される表現形式の種類が極めて限定されている。

熊取谷(1989)では数量的な研究よりむしろ質的な研究に重点が置かれている。そこで、もっと広範なデータに基づく実証的研究がなされる方が望ましいと考えられる。丸山(1996)は日本人の日常会話におけるほめ表現とそれに対する返答とを筆記により収集し、それらを文法的な見地から数量的に分析した。

丸山(1996)は、日本語の「ほめ」の表現形式について、「Makino and Tsutsui(1986:18-19)から、以下の七文型をカテゴリーとして設けている」(丸山1996:76)。

〈1〉 Subject/Topic Prt Y Copula (田中さんは優等生だね。)

〈2〉 Subject/Topic Prt Adj (そのセーター可愛い。)

〈3〉 Topic (experiencer) Prt Y Prt Predicate (本田さんはテニスが上手だ／上手ですね。)

〈4〉 Subject/Topic Locative Direct Object Verb (transitive) (心理学すごいことをやっているねー。)

〈5〉 Subject/Topic Prt Verb (intransitive) (スミスさんは毎日五キロも走るんだってね。)

〈6〉 Location/Topic Prt Prt Subject Quantity Verb (existence) (このクラブには全国大会出場者が五人もいるんだってね。)

〈7〉 Subject/Topic Prt Location Prt Quantity Verb (existence) (全国大会出場者が

このクラブには五人もいるんだってね。)

このように再分類した上で、丸山（1996）では日本語のほめの表現文型の特徴を次のように指摘している。

- (1) 日本語のほめでは文型〈2〉が最もよく用いられるという傾向がある。
- (2) 日本語のほめの文型には男女の差がある。
- (3) 動詞（特に他動詞）を用いた日本語によるほめでは、動詞にほめのforceを課しているものは少なく、むしろ目的語となる名詞句を「形容詞＋名詞」の形にし、名詞句の形容詞にほめの語力（force）を賦与しているものが多いようである。例えば「いい服を着ているね」「こったことしてるねえ」など。

日本語のほめの表現形式に関するこれまでの先行研究によれば、評価的行為が含まれるため、ほめの表現形式がある程度定式化されていると言える。しかし、ほめの定義でも分かるように、評価的行為であっても、明示的評価または直接的評価と暗示的評価または間接的評価との区分が存在することは認めざるを得ない。先行研究における日本語のほめ表現形式はほとんど明示的評価に基づくもので、定式化の傾向が見られるものである。

3. 先行研究の問題点

前述の通り、ほめの表現形式についての研究の中で、熊取谷（1989）と丸山（1996）の成果が目される。特に、丸山（1996）は日本語の「ほめ」を七文型のカテゴリーに分類している。その中で、文型〈2〉が最もよく用いられるという傾向があると指摘している。それによれば、「先生の授業はとてもよかったですね」は意味的には正しいと考えられる。即ち、日本語のほめ表現の言語的特徴から見れば、それは間違いとは言いがたく、必ずしも不適切とは限らない。しかし、これは日本語母語話者にはあまり見られないほめ発話例であり、日本語非母語話者の側から発せられるほめ発話であるため、よく問題にされている。例えば川口・蒲谷・坂本（1996）や山路（2004）などで「誤用例」として挙げられている。「正用」例として、「先生の授業はいい勉強になりました」や「先生、ありがとうございます」などが挙げられている。

この事実から以下の二点のことがうかがえる。

- (1) 七文型に見られる日本語のほめの表現形式にはやや問題がある。
- (2) 七文型と性質上異なる表現の形式がある。

仮に日本語のほめ発話の表現形式をこの七文型に縛られることを、ほめ発話の定式化と呼ぶと、ほめ発話の自由化とはその七文型からの解放ということになる。言い換えれば、上述第（2）点にある異なる表現形式とは何かという問題を解かなければならなくなる。

4. ほめ発話の語用論的効果の最大化

山路(2004)では、Holmes(1988)の定義を参考にして、ほめを「聞き手自身やそれに属するもの、或いは聞き手の言動に対して、明示的または暗示的に肯定的な評価を述べるものである」と緩やかに定義している。

小論では山路(2004)の定義を踏まえ、ほめる側もほめられる側も発話行為の効用の最大化を図るという効用の原理に従うとする。具体的な表現の形としては、「善意の原則」と「喜びの共感の原則」を守ることである(甘能清2013:226)。

善意の原則はほめ発話行為の真実性効用に関わっている。ほめる側Sの善意とほめられる側H双方の善意がその中に含まれている。

- ①ほめる側Sの善意:ほめる側が誠実に命題Pを主張していれば、命題PはSの信念B(S)において真であり、しかもSはそれを意識的に信じている。
- ②ほめられる側Hの善意:ほめられる側HがSを信用しており、ほめられる側自身の信念B(H)において命題Pが「偽」ということをHが自身で示せなければ、これを受け入れる。

喜びの共感の原則はほめ発話行為の適切性効用に関わっている。

「効用の原理」は「総則」であり、「善意の原則」と「喜びの共感の原則」は「細則」である。相互関係は以下の通りである。

前提条件:そのほめ発話が目下の環境において発話者の最適の行動である。

総則=効用の原理:ほめ発話において、発話者としてのほめる側とほめられる側が常に発話の効用の最大化を目指している。

細則1=善意の原則:発話者は否定の理由がない限り、常にほめ発話の真実性を信じている。

細則2=喜びの共感の原則:発話者は否定の理由がない限り、常にほめ発話の適切性を心がけ、喜びの共感を分かち合おうとしている。

語用論的効果の最大化:発話者に喜びの共感が実現する。

5. 日本語のほめ発話のパターン

5.1 ほめ発話の深層構造

ほめ発話は評価的行為の含まれる発話行為である。従って、ほめ発話の表現形式は評価発話の特徴を持っている。評価発話は「AはBです」という深層構造を持つと考えられる。以下の例文に説明を加えたい。

- ①雨が降り出したが、さいわいタクシーが通りかかったので助かった。
- ②今年の林間学校は、さいわいなことにお天気に恵まれて、とても楽しかった。
- ③集中豪雨で川が増水し、堤防が切れたが、たいした被害がなかったのはさいわいだった。

この三つの例文では、文中における「さいわい」の位置はそれぞれ異なるが、話し手

の「安心」や「喜び」というプラスの評価が指し示されている。仮に前の二文を③の判断文のような構成に変えてみるならば、

①⁶ 雨が降り出したが、タクシーが通りかかったので助かったのはさいわいだった。

②⁷ 今年の林間学校がお天気⁸に恵まれて楽しかったのはさいわいだった。

とそれぞれに変えられる。このような構文の変化により、評価の段階差が出ており、即ち、変化前の文と変化後の文との間に、評価の語力 (force) が異なるが、評価的意味を含む文全体の意味は変わらないのである。このことから、評価の表現方法は語彙の使用ルールや語力、引いてはコンテキストの差異によって文面の構成がまちまちであろうが、文の深層構造には、いずれも「AはBである／です／だ」という判断文の性質がある。「Aは」の部分⁹は客観的叙述であり、「Bである／です／だ」は「判断」しかも「価値判断」即ち「評価」である。このような深層構造があるため、上述してきたように、評価発話の表現形式には様々な種類が派生される。

ほめ発話は受話者向けの発話行為であるため、「A」は「あなた」のような第二人称にしかならない。言い換えれば、ほめ発話の深層構造は「アナタはBです」になり、トマス・ゴードン (1985:127) がいう「ユー・メッセージ」のものになる。丸山 (1996) における文型〈2〉が最もよく用いられるのは、ほめ発話の深層構造がはっきり具現されるからであろう。しかし、このような、ほめの深層構造を具現化させたり表面化させたりする形式は得てして不適切なものになることがある。この場合、ほめの深層構造を内包した形式の表現、いわゆる定式に従わない「自由化」したほめ発話のほうが必要であろう。その一つの手段に「アイ・メッセージ」がある。

5.2 アイ・メッセージほめとユー・メッセージほめ

アメリカの臨床心理学者であるトマス・ゴードン博士は子供や生徒との接し方の中で、評価を行う場合に用いられる様々なメッセージの効果と比較し、検証した上で、「ユー・メッセージ」と「アイ・メッセージ」を区分した。トマス・ゴードン (1985:127) は、その「ユー・メッセージ」と「アイ・メッセージ」を以下のように説明している。

「ユー・メッセージ」とは主語が「あなた」で、話し手が自分のことを語らず、「あなた」である受け手だけに焦点を当てるメッセージのことである。次の12の話の型を考えると、その全てに「あなた」が主語になっていることが分かる。

- (1) (あなたは) それを止めなさい。= 命令
- (2) (おまえが) 静かにしないと、ただではすまないぞ。= 警告
- (3) (君は) もっと知るべきだ。= 説教
- (4) (君は) やればできるのよ。= 理詰め
- (5) (おまえは) 私が指示したとおりにやりなさい。= 解決策の提案・命令
- (6) (あなたは) 慎重に考えないのね。= 批判
- (7) (おまえは) まるで赤ん坊だ。= 悪口

- (8) (君は) 仕返しをしたいんだね。=分析
(9) (あなたは) いつもはとってもいい生徒なのよね。=肯定的評価
(10) (おまえも) あしたになれば、気分も少しは晴れるだろう。=慰め
(11) (君は) なぜそんなことをしたんだい。=探りを入れる質問
(12) (あなたは) アインシュタイン二世だわ。=皮肉

このようなメッセージでは、「話し手が聞き手の行動をどう感じるか」「受け手のおかげで話し手がどんな影響を受けているか」は伝えられない。それに対して、「アイ・メッセージ」は主語が「私」で、相手の行動を自分がどのように感じたかを、正確に表現するはっきりしたメッセージである。話し手自身の内側で何が起きているかをはっきり聞き手に伝える。正確で話し手の自己開示のメッセージであると同時に、出来事の責任を「私の内部」に置き、いわば「責任を負うメッセージ」でもある。例えば、「私が気持ちいいのは……」「……は、嬉しい驚きでした」「……にはほっとしましたよ」「……のときは、本当に楽しかったなあ」「あのときは興奮しましたよ、だって……」等である。

ほめ発話は一般的には、相手の属性（ファッション、センスなどの外見的なもの）と長所、ユニークな個性などの内面的なもの）や行動（道徳的行為や過程・態度など）や能力（伸び、できるようになったなどの変化）など、相手について言うことであるため、ユー・メッセージになりやすく、相手についてこちらが判断し評価するような、いわゆる明示的な評価を表す表現が続きやすい。「よく、できたわね」「体の動きの、バランスがよかったよ」「あのスピーチは、とてもよくできたね」「なんて綺麗な肌なのでしょう」等等である。ところが、アイ・メッセージは、相手を明示的な評価を行わない。自分について伝えることを通じて、相手への暗示的な評価がなされるのである。この違いは決定的であると言われている。なぜならその明示的な評価こそ、相手に不快感を抱かせる恐れがあるからである。次の例で比較すれば、その大きな違いが分かるだろう。

●例1 (トマス・ゴートン1990: 79より)

状況：午前中に友人が、あなたの家を訪ねてきた。二人で話す間中ずっと、7歳になるあなたの子供が、おとなしく一人遊びを楽しんでいた。

アナタ：鈴木さんが来ている間、あなたはずっといい子でいたわね。

アナタ'：今日は鈴木さんと途中で邪魔されないでお話ができ、本当にうれしかったわ。

前者は明示的な評価のユー・メッセージとなり、後者は暗示的な評価のアイ・メッセージとなるのである。

●例2 (トマス・ゴートン1990: 79より)

状況：12歳になる子供の、誕生パーティーの後で。散らかった部屋をあなたが言う前に、その子が綺麗に片付けた。

アナタ：パーティーの後片付けをしてくれるなんて、思いやりがあっていいわね。

アナタ'：全部綺麗に片付けてくれて、ほっとしたわ。だって、パーティーの後とは

ても疲れて、片付けがいやだなあって、恐怖を感じてたくらいだから。

この例でも同様のことが言える。即ち、前者は明示的評価のユー・メッセージとなり、後者は暗示的評価のアイ・メッセージとなるのである。

ゴードンの考えに基づけば、ほめ発話は二つのパターンに分けられる。一つは定式化されやすい「ユー・メッセージ」のほめ発話であり、もう一つは定型化されにくい「アイ・メッセージ」のほめ発話である。小論では、前者のことを「ユー・メッセージほめ」と言い、後者を「アイ・メッセージほめ」と言う。「ユー・メッセージほめ」は、ユー・メッセージを使って、ほめられる側をほめるという発話のことであり、「アイ・メッセージほめ」はアイ・メッセージを使ってほめられる側をほめるという発話のことである。ほめの活用において、どちらの効用が大きいかは具体的な状況にもよるが、一般的には、「アイ・メッセージ」のほうがより受け入れやすくなると考えられる。

6. アイ・メッセージほめとユー・メッセージほめの効果

ゴードン博士の理論によれば、「先生の授業はよかったですね」は「ユー・メッセージほめ」であって、「先生の授業、ありがとうございました」は「アイ・メッセージほめ」である。また川口・蒲谷・坂本（1996）や山路奈保子（2004）においても指摘されたように、「先生の授業はとてもよかったですね」より「先生の授業、ありがとうございました」のほうが受け入れられやすいのである。また、小林（2009：120）の第5章の「うれしいほめ言葉セレクト20」において、人気トップ5は「ありがとう」「助かった」「○○さんがいてくれて良かった／頼りにしている」「任せてよかった／次もお願い」「おかげさま」というものである。繰り返しになるが、これらはほめ言葉の要素を満たしているため、場合によって日本語では感謝の念を込められていると同時に、ほめ言葉としても受け止められる。これらの言葉はどのような特徴を持つのかというと、いずれも直接評価を表すユー・メッセージほめではなく、「自己開示」を示すアイ・メッセージほめである。これらの事実から、アイ・メッセージほめのほうがユー・メッセージほめよりほめられる側に受け入れられやすいと言えよう。言い換えれば、ユー・メッセージほめに比べて、アイ・メッセージほめのほうが、善意の原則と喜びの共感の原則を守っていて、効用がより大きいものである。

まずアイ・メッセージほめに見られる善意の原則を見ていく。アイ・メッセージほめは、ほめる側がほめられる側の「良さ」と認める内容に対する反応などを通して相手を暗示的にほめることであるため、一方では、ほめる側としての発話者Sの善意が伺えるし、他方では、アイ・メッセージほめは、裏読みの余地はなく、また発話者の考えは自由であり、それを否定することは失礼になるので、受話者は素直に受け取るしかない発話であって（小林2009：109）、そのメッセージにおける命題が「偽」であることをほめられる側が自身で示せなくなるのである。即ち、アイ・メッセージほめは善意の原則を守っているのである。

また、ゴードン博士の指摘によると、アイ・メッセージは、相手が信用できるものや、その時の話し手の本当の感情またはその感情の強さを正確に表すものでなければならぬという。即ち、アイ・メッセージは自然に出る本音なのである。「自然に出る」というのは「今、ここでの感情で、あらかじめ用意されたものではない」ことを意味し、本音というの、「メッセージが内的な感情と一致している」ことを意味している。従って、アイ・メッセージほめにはほめる側がほめられる側のことで感動している、ほめられる側のことで喜んであげることが読み取れるので、ほめられる側も嬉しいという「喜びの共感」が存在する。

このように、アイ・メッセージほめは善意の原則と喜びの共感の原則が守られるため、そのほめ発話の効用が大きくなる。それに対して、ユー・メッセージほめは善意の原則と喜びの共感の原則を満たすことができないとは言えないものの、発話に関わった内容の真实性は確保されるという条件が求められると考えられる。なぜなら、ユー・メッセージほめは直接的評価の表現であり、上からの目線で決め付けられた印象が見られ、「私のことを知らないくせによく言うな」というような、ほめられる側からほめる側への反発的感情を招きやすいからである。ほめられる側としては、ほめられたことを100%納得できないと、否定したくなる。従って、テストの点数のように、誰が見ても明らかなデータがある時や、仕事の成果をほめる側、ほめられる側双方が目に見える状態であればユー・メッセージが有効ではなくなると考えられている（小林2009：109）。アイ・メッセージほめの効果が分かるような具体的なほめ会話例を見ていきたい。

●例3¹

発話者A：美代子

発話者B：「私」

状況：「私」たちは、死んだ同僚の娘である「美代子」の卒業と就職を祝うために集まっている。最後に池谷が卒業記念に買って来た伊勢丹の包みを差し出した。美代子があけると、とき色のセカンドバッグが入ってきた。材質はスウェード。なかなか上品なバッグだった。

A1：まあすてき。これをわたしにくださるんですか。

B1：気に入ってもらえるとうれしいんだが。

A2：うれしいわ。どうもありがとうございます。ひとつ欲しかったものですから喜んで使わせていただきます。

(志水辰夫「いまひとたびの」より)

この例では、「セカンドバッグ」をほめるように見えるが、実際は「私」の「上品な目」をほめることである。A1のほめ発話には、「私はこの素敵なセカンドバッグが気に入っている。これがもらえて私はうれしい」というアイ・メッセージほめが読み取れる。その奥には「あなたの上品な目があってはじめてこんなすてきなセカンドバッグが選べて

1 山路（2004）からの二次引用である。

いるのである」というほめが含まれている。Bの「私」が選んだものであるから、当然その「セカンドバッグ」の素敵さという真実性が「私」にも認められ、Aの善意と喜びが感じられるのである。「私」も喜びの共感ができ、そのほめを受け入れるのである。

●例4²

発話者A：工藤

発話者B：流実子

状況：流実子は弁護士事務所に勤めている。その事務所に編集者の工藤が来て弁護士を待っている。

B1：申し訳ありません。二時には必ず戻ると言っていたんですが。

A1：いいんだよ。君がそんなに気にすることはないよ。

(工藤はいつものように穏やかにほほ笑みながら、流実子に言葉をかけた。)

A2：編集者は待つことになれているんだ。先生が忙しいのはよくわかっている。それにしても、君はコーヒーを入れるのがうまいね。ここに来ると、君のコーヒーが飲めるのが楽しみなんだ。

B2：ありがとうございます。(流実子は少し照れて、肩をすくめた。)

(唯川 恵「恋人達の誤算」より)

A2のほめ発話には、「君はコーヒーを入れるのがうまいね」というユー・メッセージほめもあれば、「(私は)君のコーヒーが飲めるのが楽しみなんだ」というアイ・メッセージほめもある。しかも、そのユー・メッセージほめはほめの応用テクニックに合っている。即ち、目の前においしいコーヒーがあるという真実性が確保されるものである。従って、このようなほめをほめられる側の「流実子」が少し照れていてもうれしく受け入れたのである。

このように、「善意の原則」と「喜びの共感の原則」に基づいて、确实性の確保が難しい場合などには、ユー・メッセージほめよりアイ・メッセージほめを使うほうがもっと効用が高く、受け入れられやすいと考えられている。但し、一つ注意しなければならないことがある。それは日本語におけるユー・メッセージのアイ・メッセージ化の方法である。日本語の構文の特徴によれば、ユー・メッセージの後に安易に「～と私は思う」と付けたら「私」が主語になるアイ・メッセージになると考えられやすいであろう。例えば「あなたがよくやっていますね」を「あなたがよくやっていると私は思う」のようになればアイ・メッセージになるのではないかというやり方などである。しかしながら、それは間違っているといわざるを得ない。なぜなら、「アナタ」が「主語」のまま、「目的語」にならないからである。例えば「優しい」のように、一言だけ言う場合には「ワタシ」と「アナタ」のどちらにも受け取れるほめ言葉がある。ほめられる側から気分よく受け止めてもらうにはアイ・メッセージでほめる方がより効果的である。しかし、「私は」を付ける方法には「私は、あなたが優しいと思う」と「私は、あなたを優しいと思

2 山路(2004)からの二次引用である。

う」という二通りの付け方が見られる。前者は「あなた」が目的語にならないので、「～と、私は思う」とつけても、アイ・メッセージにはならない。

7. 終わりに

小論では、中国人日本語学習者が教師に対して「先生の授業はよかったですね」とよく言うことから出発して、このほめ発話がなぜよく口に出されたのか、またなぜ不適切と見なされたのかという問題を中心に分析を試みてきた。その結果、次のような結論にたどり着いた。

①丸山（1996）にまとめられた日本語のほめ表現の七文型では、文型〈2〉（そのセーター可愛い）が最もよく用いられるという傾向があるため、「先生の授業はよかったですね」は文型〈2〉の活用例であり、よく使用されるのもそれなりに言語的理由があると考えられる。

②先生の授業はよかったですね」の改善例として「先生の授業はいい勉強になりました」や「先生、ありがとうございます」がよく提案されている。前者は「ユー・メッセージほめ」であり、後者は「アイ・メッセージほめ」であって、ほめ表現の定式化から解放され、発話者双方における善意の原則と喜びの共感の原則がよりよく実現しやすいため、語用論的効果がより大きいと考えられる。

こういった問題について、さらに深く掘り下げる必要があると思われる。例えば、中国人日本語学習者の場合に限って言えば、中国語でのほめ表現による干渉の視点から、「老师，您的课上得真好！」が「先生の授業はよかったですね」にどのような干渉をもたらしているのかなどを分析する必要があるが、紙幅の関係で触れることができなかった。今後の課題としたい。

（著者紹介）

甘能清：中国華南師範大学外国語学院講師

石 剛：広東外語外貿大学講座教授・本学文学部教授

参考文献

1. Manes and Wolfson. The compliment formula. in:Coulmas ed. Conversational Routine [C].The Hague: Mouton, 1981. 79～112
2. Wolfson, N. An emperical based analysis of complimenting behavior in American English. in: W.E.J. (Ed.). Sociolinguistics and Language Acquisition. [C]. Rowley, MA: Newbury House.1983.82～95.
3. 川口義一, 蒲谷宏, 坂本恵. 待遇表現としてのほめ [J].日本語学, 1996, Vol.15 (5): 13～22
4. 甘能清. ゲーム理論に基づく日本語のほめ発話行為の研究 [M].広州: 中山大学

出版社, 2013.

5. 小林作都子. その「ほめ方」がやる気を奪う! [M]. 東京: 日本経済新聞出版社, 2009.
6. 熊取谷哲夫. 日本語における誉めの表現形式と談話. in: 広島大学教育学部日本語教育学科・留学生日本語教育編. 言語習得及び異文化適応の理論的実践的研究2[C]. 広島: 広島大学教育学部日本語教育学科, 1989. 97 ~ 108
7. 鈴木亮子. 評価を伴う伝達動詞: 「ほめる」・「しかる」・「おこる」の分析. in: 日本認知言語学会編. 日本認知言語学会論文集5 [C]. 東京: 日本認知言語学会, 2005. 629 ~ 632
8. 高崎文子. 「ほめ」の構造とその効果: ほめ日記の分析から. in: 日本教育心理学会. 日本教育心理学会総会発表論文集49 [C]. 東京: 日本教育心理学会, 2007.46
9. トマス・ゴードン (奥沢良雄・市川千秋・近藤千恵). 教師学: 効果的な教師 = 生徒関係の確立 [M]. 東京: 小学館, 1985
10. トマス・ゴードン (近藤千恵). 親業・ゴードン博士—自立心を育てるしつけ [M]. 東京: 小学館, 1990.
11. 西尾寅弥. ことばの意味に伴う評価性 [J]. 国語と国文学, 1998, 6: 1 ~ 18
12. 野元菊雄. ほめるといふ言語行動 [J]. 日本語学, 1996, Vol.15 (5): 4 ~ 12.
13. 林伸一. 「ほめる・ほめられる」教育—ほめる対象・方向・範囲・内容・動機・効果などの分類試案— [J]. 教育学研究紀要, 2002, Vol.48 (2): 374 ~ 379
15. 平田真美. ほめ言葉への返答 [J]. 横浜国立大学留学生センター紀要, 1999, 6: 38 ~ 47
16. 古川由理子. 「ほめ」が皮肉や嫌みになる場合 [J]. 日本語・日本文化研究, 2010, 36: 45 ~ 57
17. 古川由理子. 「ほめ」の条件に関する一考察 [J]. 日本語・日本文化研究, 2000, 10: 117 ~ 130
18. 古川由理子. 「ほめ」の種類—受け手に直接関係しない「ほめ」を中心に [J]. 日本語・日本文化研究, 2002, 12: 41 ~ 54
19. 古川由理子. 言語機能導入への一試案—ほめを中心に— [J]. 日本語・日本文化研究, 2001, 11: 57 ~ 72
20. 古川由理子. 書き言葉データにおける<対者ほめ>の特徴—対人関係から見た「ほめ」の分析— [J]. 日本語教育, 2003, 117: 33 ~ 42
21. 本間正人, 祐川京子. やる気を引き出す—ほめ言葉ハンドブック [M]. 東京: PHP研究所, 2006.
22. 丸山明代. 男と女とほめ—大学キャンパスにおけるほめ行動の社会言語学的分析— [J]. 日本語学, 1996, Vol.15 (5): 68 ~ 80
23. 山路奈保子. 日本語の談話における「ほめ」の機能 [J]. 比較社会文化研究, 2004,

15 : 109 ~ 118

24. 葉慧君. 人間関係からみた「ほめ」の表現について—日本語と中国語のテレビ番組・ドラマや映画シナリオなどの分析から [J]. 外国語学会誌, 2007, 37 : 201 ~ 210
25. 米沢久美子. ほめ言葉の意図—イメージお共有をめざして— [D]: [修士論文]. 東京: お茶の水女子大学, 1998

PRINTED BY
SEIKO-SHA CO. LTD.
1-5-15, NISHITSUTSUJIGAOKA, CHOFU-SHI, TOKYO

Seikei University
3-3-1, Kichijoji-Kitamachi, Musashino-shi,
Tokyo, 180-8633 Japan